

# 探訪 北の風景 104

## 小・中学校で「木育」授業 オホーツク管内津別町

青木和弘

樹木の香りが満ちた森の空気を胸いっぱい吸い込む心地よさは何ものにも代えがたい。

「ノノの森」（町民の森自然公園）は、津別町市街から23キロほど南東にあり、毎年9月に小学校3年生が授業で訪れる。木の肌やコケに触り、ふわふわとした地面の感触を確かめ、チクチクする松葉の匂いをかぐ。大きな写真はエゾマツの倒木から若木が育っているところを見学する生徒たちだ。エゾマツは苗床では育てづらいため、こうして育った若木を採取して植林の苗木に使うという。「木育（もくいく）」という北海道生まれの教育用語がある。津別町は全国で唯一、2009年から、この木育の授業を小学校と中学校のカリキュラムに設けている。

木のおもちゃを製作する「KEM工房（札幌市）



を主宰し、「木育」の提唱者の一人である煙山泰子さんは、「木を子どもの頃から身近に使っていくことを通して、人と森や木との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育てたいという思いをこの言葉に込めた」と話す。

津別町の木育授業とはどのようなものなのか。

小学校3年生と5年生、中学校1年生が、年3回、各2時間、合計6時間おこなう。小学校は総合学習の時間をあて、中学校は技術科の授業で取り組む。小中を合計すると18時間の授業になる。

例えば小学校3年の1回目は「木育の玉手箱」を使った木とふれあう授業だ。町内の木工会社が町からの特注で製作したセットである。中身は、サクラやナラやエゾマツなど5種類の板、年輪の見える幹の輪切り、いろいろな木の実やマツカサ、ルーペ、木のおもちゃもあり、手に取ると大人でも楽しくなる。2回目がノノの森の見学で、3回目は木製のタマゴに焼きペンなどを使って模様を付け「自分だけのタマゴ」を作る授業だ。5年は木を使った工作と、町内の木材工場の見学に出かける。中学校では動く木のおもちゃづくりで、工具の使い方も一緒に学ぶ。

こうした授業を始めた背景には、町民の中に、林業と木材業で繁栄を続けてきた誇りと強い郷土愛がある。オホーツク管内の企業で売上高54年間連続首位を占める丸玉木材は1902（明治35）年創業で従業員550人。津別町に本社と工場を置きながら関東と関西にも工場を持ち、全国に建材を供給している。さらに同社は病院のなかった



「木育の玉手箱」の中身はこちら、5種類の板（エゾマツ、サクラ、セン、ナラ、イチイ）、年輪の見える幹の輪切り、木の実やマツカサ、木のおもちゃ、ルーペなどが入っていて、木の種類による手触りや重さなど質感の違いがよくわかる

津別に唯一の病院「津別病院」を設立して町民の健康も支えている。

横浜名物の崎陽軒（きょうけん）の「シウマイ弁当」は1日2万4000食を販売するが、その弁当箱に使う薄い板である経木（きょうぎ）を供給しているのが三共（1920年創業）と、木工工作キットでも知られる加賀谷木材（1948年設立）の2社だ。

また、昨年開催された東京オリンピックとパラリンピックのメダルケースを製作したのが家具製作の山上木工（1950年創業）である。いずれも高い技術力で知られた津別の会社である。こうした地場企業の活躍が町民にも活気を与えている。

同町教育委員会の係長で社会教育主事の尾路克彦さんは、「ここには大学などがないので多くの子が津別から巣立ちます。だから木育授業には、





「ノンノの森」でおこなう小学校3年の木育授業「森へ行ってみよう!」。木のおもちゃ製作の「KEM工房」(札幌市)主宰の煙山泰子さんが講師で、大きなエゾマツの倒木から若木が育つ様子を観察しているところ(同町提供2021年9月)

昨年5月に開庁した津別町の新庁舎。外装にも内装にも、地元の木材をふんだんに使っている(同町提供)



新庁舎の内装は天井の梁が印象的だ。机やテーブル、イスなども地場企業が製作している

「ふるさと津別」を忘れないでほしいという、人たちの特別な思いが込められているのだと思います」と語る。

津別町の人口は2198世帯4236人(2022年10月末現在)。最盛期の1960年は1万5676人である。安い外国材の流入で林業・木材業が衰退し、農業従事者も減ってきたが、近年は農業の後継者不足が落ち着きを見せ、町には若者を中心に再興に取り組む機運が生まれ、町の魅力発信にもエネルギーを感じる。

ぜひ見てほしいのが町の動画発信「タウンニュースつべつ」だ。ユーチューブで配信していて、進行役は若い男女の役場職員。町内の話題を取り上げ、2017年4月から67本配信し、多いときは視聴回数が2600回を超えているから、人口を考えれば驚異的な人気だ。動画を見ているだけで津別町の元気が伝わってくる。